

令和3年度 研究紀要 (web 版)

子どもを支える保育

～ 評価を通して(3年次)～



上越教育大学附属幼稚園

もくじ

| | | |
|---|----|---------------------------|
| 1 | 1 | 研究概要 |
| 1 | 2 | アウトカムプロセス |
| 1 | 3 | 研究ヒストリー |
| 2 | 1 | 1 3歳Ⅰ期エピソード |
| 2 | 1 | 2 3歳Ⅰ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 2 | 1 3歳Ⅱ期エピソード |
| 2 | 2 | 2 3歳Ⅱ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 3 | 1 3歳Ⅲ期エピソード |
| 2 | 3 | 2 3歳Ⅲ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 4 | 1 3歳Ⅳ期エピソード |
| 2 | 4 | 2 3歳Ⅳ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 5 | 1 4歳Ⅴ期エピソード |
| 2 | 5 | 2 4歳Ⅴ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 6 | 1 4歳Ⅵ期エピソード |
| 2 | 6 | 2 4歳Ⅵ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 7 | 1 4歳Ⅶ期エピソード |
| 2 | 7 | 2 4歳Ⅶ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 8 | 1 4歳Ⅷ期エピソード |
| 2 | 8 | 2 4歳Ⅷ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 9 | 1 5歳Ⅸ期エピソード |
| 2 | 9 | 2 5歳Ⅸ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 10 | 1 5歳Ⅹ期エピソード |
| 2 | 10 | 2 5歳Ⅹ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 11 | 1 5歳Ⅺ期エピソード |
| 2 | 11 | 2 5歳Ⅺ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 2 | 12 | 1 5歳Ⅻ期エピソード |
| 2 | 12 | 2 5歳Ⅻ期エピソード (やっぱりそうだね納得版) |
| 3 | | 今年度の研究を通して |

研究概要

1 研究テーマ

子どもを支える保育 ―評価を通して― (3年次)

2 研究テーマについて

平成30年4月より全面実施となった幼稚園教育要領から4年が経過した。同時に幼児教育に関する記載がおおむね共通化され、質の高い幼児教育が、幼稚園・保育園・幼保連携型認定こども園のどの施設形態でも、同じ水準で確保できるしくみが整えられた。また、令和元年10月1日より、幼児教育・保育の無償化もスタートするなど、幼児教育を取り巻く環境は大きく変化している。幼児教育に対する関心が高まる一方で、求められているのが、「幼児教育の質の向上」である。

令和2年5月26日に出された「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」の中間報告書では、幼児教育の質の向上の実現に向けて、総合的に施策を展開する観点から、6つの柱に沿って、具体的方策が提言された。その柱の一つである「幼児教育を担う人材の確保・資質及び専門性の向上」では、「短時間であっても、日々の保育を振り返り、教育課程の改善・充実に向けた園全体でのカリキュラム・マネジメントの実施につなげられるよう、教職員間で意見交換等を行うこと」とあり、その重要性を述べている。また、もう一つの柱である「幼児教育の質の評価の促進」では、他の学校種と比べて評価の実施が進んでいない状況を指摘し、「各園の独自性を確保しつつ、質の高い幼児教育を提供するためのPDCAサイクルの構築」と「幼児教育の質に関する評価の仕組みの構築に向けた手法開発・成果の普及といった取組の充実」の必要性を述べている。日々の保育をどう捉え、職員間で共有し、次の保育につなげていくのかは、幼児教育の質の確保・向上を目指す上で欠かせない要素である。そして、それを自己評価でとどめずに、外部の視点を取り入れながら、常に見直し、更新していくことが望ましいと考える。

本園では、平成25年度から平成30年度までの6年間、「遊び込む子ども」というテーマのもと、幼児の遊び込む姿を支える教師の援助や環境構成の在り方を探り、教育課程の見直しを進めてきた。そして、保育を実践するにあたり、その保育が幼児の育ちを支えることにつながっていたかを評価する手立てを探るべく、令和元年度より、研究テーマを「子どもを支える保育―評価を通して―」と設定して研究を進めてきた。1年目は、保育を評価するしくみを整えた。日々の保育記録やカンファレンスなど、4つの取組をもとに振り返りのサイクルを充実させ、保育改善を進めてきた。職員間で保育を語る機会が増えてくると、個々の保育の捉えに方向性があることが見えてきた。そこで2年目は、「こんなふうに育ってほしい」と考える姿に照らして、教師が行った援助や環境構成などが幼児の育ちや学びを支えるものになっていたか、またはそのための改善になっていたかを判断する考え方、すなわち保育の評価観といえるものを探ることにした。ここでは、「学びの物語」の実践者であるマーガレット・カーの新しい評価(アセスメント)方式を参考にカンファレンスを行い、現時点での7つの評価観を捉えることにつながった。また、各クラスのエピソード事例をもとに、幼児の姿の読み取りや援助に向かう考え方などについて共感した部分にマークや記述を入れた「やっぱりそうだね納得版」を作成し、共通認識と共通性を見出すことができた。これらは、決して押し付けられた評価観ではなく、カンファレンスを重ねる中で一人一人の中に得られたものであった。しかし、これらは本園のその時期の保育で導き出されたものであり、十分なものであるかどうかは検討が必要であると感じた。今後、さらにこれらの評価観を捉え直しつつ、外部の視点を入れた評価を得ながら、より確かなものにしていく必要がある。

そこで、今年度は共通認識として得られた7つの評価観を、日々の保育を実践する中で捉え直し、カンファレンスを通して更新していく。また、これまでの研究で培われてきた保育を評価するしくみや考え方が、幼児の育ちを支え、より質の高い保育を実践するためのものになっているかどうかを、外部の研究者や他園の職員らとの意見交流を通して見直していく。

3 研究計画

第1年次（令和元年度） 「保育を評価する手立てを探る」

- ・これまでの保育記録の見直し・検討を通して、保育記録が振り返り際の有効な資料となり得るために必要な内容と様式を見出す。
- ・保育の情報を共有し保育改善につながる効率的なカンファレンスのもち方を検討する。
- ・保育記録やカンファレンスの取組を活かして、保育を評価するしくみを探る。

第2年次（令和2年度） 「保育の評価観を見出す」

- ・本園における保育の目指す目標や方向性について、具体的な共通認識を得る。
- ・保育を評価する際に、適切な保育だったと判断するための考え方（評価観）を整理する。

第3年次（令和3年度） 「保育の評価をみんなと進める」

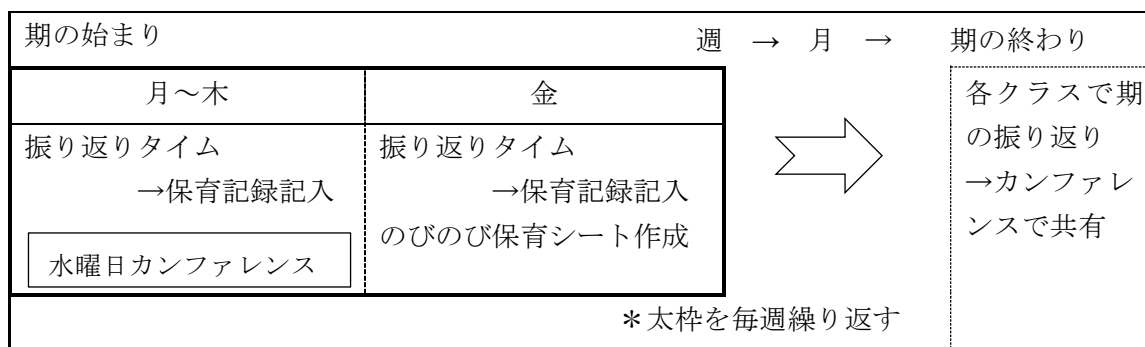
- ・保育を評価する4つの取組のサイクルを継続的に実践する。
- ・日々の保育を振り返り、カンファレンスを重ねながら7つの評価観について語り、更新する。
- ・保育の評価について、外部や他園と意見交流を行いながら捉え直す。

4 第1年次の研究

平成30年度末に完成した新しい教育課程と年間指導計画に沿って実践を進めながら、日々の保育について振り返り、保育記録に残す内容や記述の仕方を検討してきた。その結果、以下のことが見えてきた。

本園における保育の評価のしくみ

本園では、保育における評価を「幼児の発達する姿に照らして、教師が行う環境構成や援助が適切かどうかを振り返り、改善を図っていくこと」と捉えた。そして、保育を振り返る具体的な資料である保育記録と、保育についてより多くの教師で語るカンファレンスの見直しと検討を進めてきた中で、本園における保育を評価するしくみが整えられてきた。それが次の表である。

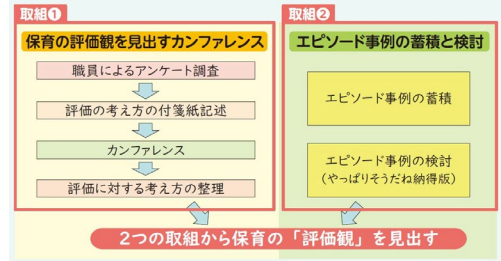


しくみを構成する4つの取組

①保育記録

毎日10分の振り返りタイムを設け、副担任とその日の保育について振り返った。自分の保育を振り返る材料である保育記録がより有効なものとなるためには、右の5つの視点について記

録することが効果的であることが見えてきた。毎日書き加えていくことにより、幼児がどのように遊びを深めていったのか、遊びへの興味がどのように移っていったのか、そこから幼児の内面を読み取り、援助を考える「改善のサイクル」が回るようになった。



②のびのび保育シート

これまでの週案を、保育記録をもとに保育を改善するサイクルが視覚的にも分かる様式に変え、「のびのび保育シート」と呼ぶことにした。

①「保育記録」
1週間分をまとめた保育記録をデータ化した記載。

②「教師の振り返り」
その週の中で話題になったことや気付いたことなどを「教師の振り返り」として、保育記録の横や下に記述。

③「次週に向けて」
①②の振り返りをもとに、次週に向けて考えたことや意識したいことを記述。

④「週の計画」
①②③を受けて作成した次週の計画を記述。

シートは毎週作成し、一年間の保育の改善の足跡が蓄積される。期の振り返りでは、その蓄積したのびのび保育シートをもとに行っている。また、他の教師がどのように幼児の姿を捉え、どのような心もちで援助しているのか、情報を共有するツールにもなっている。

③カンファレンス

毎日行う 10 分の振り返りタイムと水曜日に行うカンファレンスの 2 種類のカンファレンスを行ってきた。立場や経験年数に関係なく、自分の迷いなど話したいことを話す中で、自分の保育を多面的に捉えたり主観を磨いたりすることにつながり、保育に活かすようになった。また、無理なく続けられるように短時間で効率よく行ってきた。

カンファレンスのPoint

- 時間を意識する
- 「話したい」ことから話す
- < 水曜カンファレンス >
- ・ 茶話会の雰囲気大切に
- ・ 誰でも気軽に話す
- ・ 話題は保育についての迷いや悩み、面白さなど、何でもOK

④期の振り返り

保育を改善するサイクルを繰り返しながら、期の終わりには、その期全体を通して幼児の姿の変容や教師が行ってきた環境構成や援助についてまとめの振り返りを各クラスで行った。日や週とは違った、期という長いスパンだからこそ捉えられる幼児の姿があり、また教師の援助についても長い目でその効果を検証することができた。

5 第 2 年次の研究

第 1 年次で整えた保育の評価のしくみを実践するにあたり、本園の目指す評価の考え方について、カンファレンスとエピソード事例の 2 つの検討を行ってきた。その結果、次の事が見えてきた。

保育の評価観を見出すカンファレンス

保育に携わる職員でカンファレンスを行い、本園における保育の目指す方向性について具体的に語り合いながら、考えを整理し、共通認識を導き出すことにした。ここで参考にしたのが、マーガレット・カーの「保育の場で子どもの学びをアセスメントする」という著書にあるアセスメントモデルである。これを参考にアンケート項目を作成し、職員から得た回答を基にカンファレンスを行った。そして、見えてきたのが7つの共通認識である。

| マーガレット・カーのアセスメントモデルを参考にした項目 | カンファレンスで得られた共通認識 |
|------------------------------|------------------------|
| ① 何を目的に保育の評価を行っているか | 幼児の自ら育とうとする力を支える |
| ② 幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか | よりよく生きる力の基礎を育む |
| ③ 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか | 幼児のしていることを肯定的に捉える |
| ④ どのように妥当性を確認しているか | 職員の語り合いによって共感・合意を得る |
| ⑤ 保育の質の向上をどのように捉えているか | 幼児の姿をもとにした援助のレパトリーが広がる |
| ⑥ どのように評価しているか | 本園の保育を評価するしくみに沿って行う |
| ⑦ 教師にとってどのような価値があるか | みんなが笑顔で前向きになれる |

カンファレンスを重ねる中で見えてきたのは、保育場面に即して具体的に考えるというよりも、本園の保育で大事にしていることや特徴などを一歩引いて大きく捉えながら保育をしている職員の姿であった。教師の意図や願いが優先されるのではなく、目の前にある幼児の姿から教師が願いをもち、援助や環境構成が考えられるということである。そして、幼児自身の育ちの姿に何よりも価値をおいているため、教師が前面に出すぎることなく、絶えず幼児の姿を見ながら保育を行っていることが見えてきた。しかし、この7つの項目は、評価につながる考え方をみんなで語り合う「きっかけ」ともいえるべきもので、この内容で十分かどうかについては今後も検討していく必要があると捉えた。

エピソード事例の蓄積と検討

エピソード事例は実際に行われた保育実践における教師と幼児の姿を記録した事例である。職員同士でエピソードを読み合い、幼児の姿の読み取りや援助に向かう考え方などについて、大切だと思った部分や共感した部分に、それぞれがマークを入れた。これを「やっぱりそうだね納得版」として職員間で共有し、エピソードに書き起こした。保育実践場面における教師の思いや援助を参照する中で、カンファレンスで得た共通認識との共通性について検討した。エピソード事例の検討から得られた本園の保育の特徴的な考え方は、カンファレンスから得られた評価につながる考え方の共通認識と共通性があることが見えてきた。

<5歳クラス 区期 5月>「遊びたくなる場と材」

これまでの保育の様子
区期はコロナウイルス感染症予防に際して保育室内の環境整備のため今年度の区期生活は1か月遅れで始まった。感染症予防の観点から、基本的に遊びの時間は園庭で、生活の場は保育室である。想定していたとおり、区期が再開されると見合う程度の再会を体験できた。一方、どこで何をしようか悩んでいる姿も多かった。区期中は保育室、園庭、園庭を巡りながら自由に遊ぶことができた。コロナ禍で外遊びが中心の生活になり、年長児になった不安や戸惑いに加え、これまでの遊びの楽しさを思い出している様子も見られた。また、園庭で遊ぶ際には、新しい環境に慣れて安心感をもって遊ぶ様子も観察された。幼児も園庭で遊ぶ楽しさを思い出している様子が見られた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

この日、A児は遊ぶための準備が整った状態で、園庭で遊ぶ様子を見ていた。A児は「先生、見て」と呼んで、先生を見つめていた。先生は「Aちゃん、この場で遊ぶの？」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「黄色のテープみたい、やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。先生は「やさしい色だね」と声をかけ、A児は「はい」と答えた。

6 研究方法（第3年次）

（1）保育を評価する4つの取組のサイクルの継続的な実践

「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」で構成される保育の評価の4つの取組について、本年度も年間を通して継続的に実践する。本年度は担任・副担任の転出入があり、本園が大切にしてきた保育の捉え方を多面的に評価する絶好の機会であると考えた。職員間で保育を語り、記録を読み合う機会を密にし、幼児の育ちの支えになっていたかどうかについて、評価していく。また、保育実践からエピソードの収集を行い、保育を評価するときの考え方につながる事例を残し、検討の材料としていく。

(2) カンファレンスによる保育の評価観の更新

第2年次研究で明らかになった7つの評価観について、保育実践を行いながら捉え直す。昨年度はマーガレット・カーのアセスメントモデルを参考に項目を7つに設定した。本年度は本園が大切にしてきた保育の捉え方をより確かなものにするために、項目の変更や増減も考えながら再構築していく。その際、項目を決定することではなく、あくまでも常に語り合う「プロセス」を大切にしたい。職員が保育を通して感じた迷いや悩み、喜びなどを語り合い、共感したり一緒に考えたりすることで、園で大事にしたいことが鮮明になり自覚化され、共有されていくと考える。

(3) 評価の取組の発信と、他園との交流による意見交流

保育を評価する4つの取組については、これまでも研究会の実施や紀要の配信などで広く発信してきた。本年度はそれを一方的なものにせず、どう受け止められているのか、独自性がどこにあるのか、そしてどのような価値があるのかについて、本園以外の視点で意見交流を行いたい。新型コロナウイルス感染症防止対策を踏まえ、オンライン会議も取り入れた交流会を上越市内または県内外の幼稚園、保育園、こども園などに依頼する予定である。双方の保育や園運営にとってプラスに働くような保育の評価の在り方について、共に考えていく機会になればと考えている。

(4) 大学教員との連携による研究推進

本学幼年教育領域の教員からの指導・助言を受けながら研究を進めていく。保育実践者である本園教師と研究者である大学教員の双方が意見を述べ合うことで、より質の高い保育を目指すことができると考える。研究の進め方や事例の捉え方について、大学教員の意見を聞きながら保育実践や資料の集積を進めていく。

(5) 研究保育と研究会の実施

今年度も研究協力者の方以外にも広く保育を公開し、参観者や研究協力者から保育についての意見や本園の研究について助言を得る。また、10月には幼児教育研究会を実施し、参会者や研究協力者からの意見をもとに、保育や研究の方向性について検討・発信する機会とする。

| | |
|----------|--------------------------------------|
| 5月26日(水) | 第1回研究保育(公開保育・クラス別保育トーク、研究協力者会議) |
| 9月15日(水) | 第2回研究保育(公開保育・クラス別保育トーク、研究協力者会議) |
| 10月1日(金) | 第29回幼児教育研究会(公開保育、クラス別保育トーク、研究発表、講演会) |

7 研究の実際

(1) 4つの取組の実践を通して見つめた本園の目指す方向性

「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」で構成される保育の評価の4つの取組は本年で3年目となる。今年度は職員の異動が多く、本園の保育で大切にしてきたものを確かめていく中、サイクルを繰り返し回すことで見えてきたのは、「伝える」「語り合う」ことの重要性であった。

今年度は、水曜カンファレンスの始めに、保育について「言いたい」ことを一人ずつ端的に伝える「ブレインストーミング」形式の話合いを取り入れた。環境構成によって見えた幼児の姿や、保育を行って感じた悩みなど、それぞれが思い思いに語る。一見、バラバラに見える発言だが、全員が話し終わる頃には、話題に共通の視点が見えてきた。例えば、「遊びの中での教師の立ち位置」や「声のかけ方」などである。また、端的に意見を述べる形式のため、「もっと聞きたい」と思った意見には、「もう少し詳しく教えてほしい」といった発言が自然と出てきた。活発な意見交流へとつながっていく中で、今の保育に対する関心事やテーマが見えてきた。

5月の水曜カンファレンスでテーマに挙がったのが「保育で使う言葉、使わない言葉」である。遊びで思考を促したい場面やトラブルの場面、異年齢での遊びの場面など、保育の様々な場面でのような言葉かけを行っているのか、そしてそれはどのような意図があるのかといった内容で、付

箋紙でグループ分けをしながら話し合った。その際、新しく異動してきた職員から「不安」や「迷い」の言葉が多く聞かれた。どのような言葉かけが幼児の遊びを広げ、そして深めることにつながるのか、4月当初は非常に迷いながら保育を行っていたという。それが、日々の振り返りタイムやカンファレンスを行う中で、少しずつ本園で大切にしていることが分かり、保育に活かすことができるようになったという意見だった。また、本園の保育に長く携わっている職員からは、本園の保育の特徴について改めて確認するきっかけになったという意見も聞かれた。経験年数に関係なく保育を語り「合い」、そして語り「続ける」ことで、自然と同じ心もちで保育を行うことにつながるが見えてきた。



6月のカンファレンスで話題になったのは「遊びの伝承」である。本園で幼児が行う様々な遊びは、基本的に教師が「やろう」「こんな遊びがあるよ」と提示されて行うものではない。雨どい遊びを例に挙げる。砂場まで雨どいを連結し、水を流す遊びは、教師が教えたものではなく、年上の幼児が行ってきた遊びを年下の幼児が見て、一緒に遊ぶ中で学び、身に付け、自分たちで遊ぶことができるようになった遊びである。年上の幼児から年下の幼児へと遊びが受け継がれていくことを「遊びの伝承」と称し、そのメカニズムがどのようなものなのか、そして教師はどのような援助や環境構成で遊びを支えていくとよいのかについては、これまでもカンファレンスで時折話題になっていた。

ある日の遊びの場面で、4歳クラスの担任は、A児の遊びの姿を捉えた。A児は、年上の幼児が行うビールケースを使った立体的な雨どいの組み立て方に興味をもち、それを毎日じっと見ていた。「A児の主体的な遊びのかかわりを支えたい」、そう考えた担任は、副担任との振り返りでA児の姿を情報共有した。そして、共通の援助として、教師が主導して雨どい遊びを一緒に行うのではなく、砂場にいた年上の幼児とA児をつなぐことにした。年上の幼児はA児の問いかけに快く応じ、組み立て方やコツを伝えながら優しくかかわる姿が見られた。A児は嬉しそうにかかわりながら雨どい遊びを楽しんでいた。その様子を担任は振り返りやカンファレンスで職員に詳しく伝えた。年上の幼児とのかかわりがA児の主体的な遊びにつながったと捉えた5歳クラスの担任は、年下の幼児に遊びを伝えるための援助や環境構成の在り方について考えるようになり、また3歳クラスの担任は、発達段階に合った雨どい遊びの基盤となる材や活動場所について他の職員と共通理解するようになった。A児の遊びの姿を発端として、雨どいを媒体とした一貫性のある保育につながったのである。ⅡⅥⅨ期のエピソード事例では、どのクラスにも雨どい遊びの援助が記述されていたことから、カンファレンスを通して、遊びの伝承を支える保育の在り方を職員全体で考えるきっかけになったと捉える。



本園が取り組んでいる4つの取組の大きな特徴は、どれも「他者を経由する」ところにある。自身の保育について考えたことを他の職員に伝える、または書いたものを読んでもらう。そして、そこで得た考えをもとに、保育の共通性や課題を見出し、明日の保育につなげていく。そうした取り組みの結果、自身の保育に共感・納得し、より保育の質の向上につながる考えや支援を得ることにつながるのである。職員に、保育に関して他の職員と語った頻度について尋ねたところ、ほとんどの職員が以前より保育について話すようになったと自覚していた。「語り、更新する保育」は保育の質の向上に効果的であるが見えてきた。

(2) カンファレンスの継続で見えてきた新しい評価観

カンファレンスの際、昨年度見出した7つの評価観の図を掲示し、話し合いの最後に振り返ること

ができるようにした。その中で、保育中やカンファレンスで多く意識していた項目は表の③④⑤であること、①②については保育の評価全体の価値観を捉えたものであり、保育の基盤として教師の心持の根底にあることが見えてきた。昨年度は、これらの7つの評価観を植物に例え、一枚一枚の葉で表現してきたが、本年度は保育の評価を継続的に実践することを通して、幼児や教師、保護者など、「みんな」が笑顔になる姿を思い描き、植物が生長する姿として表現した。

9月に行われた水曜カンファレンスで、複数の職員が現在の心持ちや心境について語る場面があった。そこでは、「カンファレンスで不安な事が共有できたので、自信がついた」「心配事があっても自然と職員が寄り添って声を掛けたり助けてくれたりするので、保育をするのが本当に楽しい」といった前向きな意見が聞こえてきた。保育を一体感をもって評価し、更新していく取組が円滑に動き始めたと捉える一方、「保育を評価する上で大切にしていることは何だろう」「この取組が効果的に働くためのポイントは何か」ということに職員の関心が向き始めた。

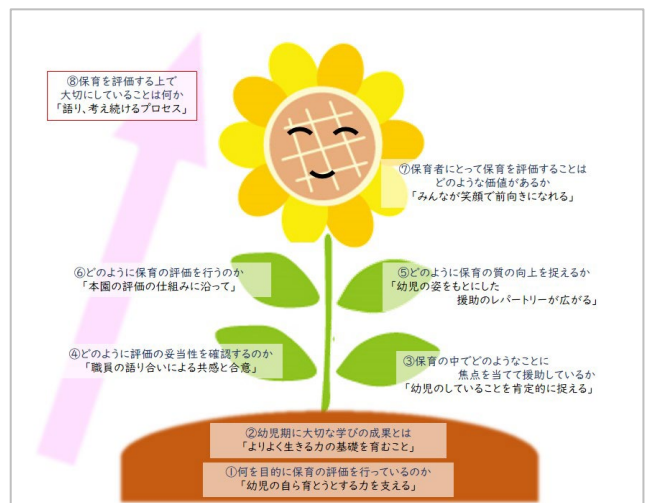


そこで、翌週の水曜カンファレンスで「保育を評価する上で大切にしていることは何か」と題し、それぞれが捉えた評価観を付箋紙で集約しつつ、そこから共通認識を得ることにした。多様な意見が出る中、語り合い、伝え合うことそのものが重要なのではないか、そしてそれが持続可能で一緒に頑張りたいと思えるものであることが大切なのではないかと意見にまとまった。正解のない保育を日々行う中で、自己評価にとどまらず、常に他の職員と語り合い、自己の保育について捉え直し、価値観を共有する過程、すなわち評価のプロセスそのものが、保育を評価する上で最も大切なことであると捉えた。そこで、新しく8つ目の評価観として、「保育を評価する上で大切にしていることは何か」を加え、そこで得た共通認識を「語り、考え続けるプロセス」とした。

| 項目 | | 共通認識 |
|----|----------------------------|-------------------------|
| ① | 何を目的に保育の評価を行っているか | 幼児の自ら育とうとする力を支える |
| ② | 幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか | よりよく生きる力の基礎を育む |
| ③ | 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか | 幼児のしていることを肯定的に捉える |
| ④ | どのように妥当性を確認しているか | 職員の語り合いによって共感・合意を得る |
| ⑤ | 保育の質の向上をどのように捉えているか | 幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる |
| ⑥ | どのように評価しているか | 本園の保育を評価するしくみに沿って行う |
| ⑦ | 教師にとってどのような価値があるか | みんなが笑顔で前向きになれる |
| ⑧ | 保育を評価する上で大切にしていることは何か | 語り、考え続けるプロセス |



昨年度の評価観



本年度見えてきた評価観

(3) 他園との交流から見てきたこと

本年度は、研究協力園であるいずみ幼稚園、妙高市立よつばこども園、上越市立はまっこ保育園の3園に協力を依頼し、保育の共通点や心持ちについて相互理解すると共に、本園の保育の評価について率直な意見を聞く機会を設定した。現在、それぞれの園に1、2回程度赴き、交流を重ねている。協議では、遊びが継続するための声かけについて話し合わせ、お互いに援助のレパトリーを広げることができた。また、互いの園の幼児の姿から見てきたことを共有し、新たな援助の方向性について検討することもできた。



9月、協力園の職員に本園の保育とカンファレンスを参観してもらい、本園が行っている4つの評価の取組について協議した。「10分という短い時間であるが、その分濃密かつ言いたいことが言える振り返りになっている」「同じ学級だけでなく、様々な職員から意見をもらえる」といったことが保育を見つめ直すことに効果的であるといった意見が得られた。また、取組を通して、職員一人一人が「自分の振り返りや記録の形をつくっていくことができる」という指摘があった。比較的自由的な記述方式、言いたいことを言えるカンファレンスの場の設定によって、保育に対する不安の解消や、より濃密な保育の連携につながるのではないかという意見もあった。4つの取組については、効率的、そして協同的な観点から、「自園でも参考にしたい」といった共感的な意見が聞こえてきた。

一方、課題としては、保育を評価するための「時間」と職員間で保育を語る「機会」を、どう捻出していくか、本園を含むどの園でも、振り返りに費やす時間の確保の難しさが浮き彫りになった。それぞれの園のカリキュラムや伝統を大切にしつつ、保育を語り、伝える時間をどのように工夫し、作り出していくのか。これについては今後も交流を重ねながらその解決策を一緒に探っていくという方向性で進めている。

アウトカムプロセス

2年間の研究を通して、評価の仕組みを整え、本園における保育の目指す方向性や考え方を評価観として見出してきた。今年度は、保育を評価するしくみとして整えてきた「保育記録」「のびのび保育シート」「カンファレンス」「期の振り返り」の四つの取組を継続して実践し、確かなサイクルとして保育に位置付けてきた。また、第二年度研究で保育の評価の共通認識として得られた七つの評価観を、日々の保育実践から捉え直し、カンファレンスを通して更新してきた。さらに、研究協力園を含む公立・私立の幼稚園、保育園、こども園と交流し、評価の取組や評価観の捉えを保育に生かすことの大切さについて意見交換を重ねることとした。研究の取組と見えてきた成果について示す。

継続的に評価し、語ることの効果

今年度は、本園が大切にしている援助の方向性や保育の心もちを共有するとともに、共に幼児の育ちを支えていくために、より確かなしくみのもとで幼児理解を深め、自己の保育を検証、分析し、明日の保育につなげていく必要があると考えた。日々の保育後に行う十分間の振り返りタイムでは、これまで以上に「話したい」「相談したい」ことを中心に語る保育者の姿があり、ある時は、週を通して環境構成の工夫について語り、ある時は異年齢で遊ぶ際のいざこざ場面での援助の在り方について語ることに繋がった。そして、そこで話し合われた思いや願いが、保育記録や水曜カンファレンスでも共有され、園全体の取組として広がった。以下に事例を示す。

年度当初、預かり保育の時間になると落ち着かない幼児の姿が課題として挙がり、水曜カンファレンスの時間を活用し、預かり保育の担当者と一緒に、保育で使う言葉の吟味や、幼児の生活の動線を意識した環境構成の工夫などについて語り合った。カンファレンスでは、園で大切にしていることや、援助の方向性などが園全体で共有され、正規保育と預かり保育の一貫した保育へとつなげることができた。また、保育者同士のミニカンファレンスが職員室で自然と生まれることもあり、評価のしくみを超えて、語り合う姿がこれまで以上に増え、個人や園全体の保育の質の向上につながった。

語り、考え続けるプロセスの重要性

第二次研究では、評価観を探る際の手がかりとして、マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』（ひとなる書房）の中にあるアセスメントモデルを参考に、保育を評価する際の本園独自の指標を作成した。今年度も、水曜カンファレンスの際に、評価観を常に意識しながら語り続けてきたところ、昨年度とは異なる視点が見えてきた。保育記録やのびのび保育シート、カンファレンスの言葉の中に「幼児のしていることを肯定的に捉える」「援助のレパトリーを広げる」といった表現が多く見られるようになった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」のような具体的な幼児の姿を捉えつつも、何を拠り所に保育の評価を行うのか。園全体の保育の質の向上につながる評価の在り方とは何かについて議論を重ねたことで、保育について語る「過程」こそが、評価を行う上で最も重要な要素であることが見えてきた。経験の異なる保育者が「聞いてほしい」「知りたい」「よりよくしたい」と願う思いを、自分の保育を交えて赤裸々に伝えていく過程、すなわち「語り、考え続けるプロセス」こそが、保育の質を向上させる上で重要であると捉えた。そこで、これまでに導き

出した七つの項目に加え、「保育を評価する上で大切にしていることは何か」という問いに対し、「語り、考え続けるプロセス」という考えを八つ目の評価観として位置付けることにした。

| 項 目 | | 共通認識 |
|-----|----------------------------|-------------------------|
| ① | 何を目的に保育の評価を行っているか | 幼児の自ら育とうとする力を支える |
| ② | 幼児期に大切な学びの成果をどのようなことだと考えるか | よりよく生きる力の基礎を育む |
| ③ | 保育の中でどのようなことに焦点を当てて援助しているか | 幼児のしていることを肯定的に捉える |
| ④ | どのように妥当性を確認しているか | 職員の語り合いによって共感・合意を得る |
| ⑤ | 保育の質の向上をどのように捉えているか | 幼児の姿をもとにした援助のレパートリーが広がる |
| ⑥ | どのように評価しているか | 本園の保育を評価するしくみに沿って行う |
| ⑦ | 教師にとってどのような価値があるか | みんなが笑顔で前向きになれる |
| ⑧ | 保育を評価する上で大切にしていることは何か | 語り、考え続けるプロセス |

交流を通して見えてきた評価の在り方

今年度は、上越市内を含む九つの幼稚園、保育園、こども園と研修面での交流を行った。それぞれの園の保育方針を尊重しつつ、互いの保育を参観したり、園内研修に参加したりしながら、本園が取り組んできた保育の評価のしくみや評価観についても伝えるようにした。また、四つの評価の取組や、教師の言葉かけ・援助をテーマとした動画を作成し、DVDやWEBで閲覧できるようにした。研究会に参加いただいた園から、「動画を自園の研修で活用したい」といった依頼をいただくこともあった。交流を通して記録の仕方、語ることの重要性に共感しつつも、一方で時間的な制約もあり、「やりたいが実現が難しい」といった保育現場の課題も見えてきた。今後も、交流を重ねながら、質の高い保育につながる評価の在り方について発信、協議していく必要があると考えている。

語り、考え続けることの意味

三年間の研究実践で見えてきたことは、「つながる」「続ける」ことの効果である。一人の保育者が毎日、誰かと保育について語り、考え、記録に残し、そしてそれを他の保育者に読んでもらう。聞いた、読んだ保育の仲間がその意味、意図を読み取り、協力したり、自己の保育に生かしたりしていく。実際に保育に携わっていない第三者の評価によって、自分の保育を客観的な視点で再認識し、保育の更新につなげていく。このような実践の連続によって、保育がよりよい方向へと確実に更新されていることを実感することができたことが、研究の大きな成果であると捉える。

研修ヒストリー

令和3年度 「子どもを支える保育～評価を通して(3年次～)」 研修ヒストリー

ここでは、研修会議やカンファレンスでどのようなことが検討されたのか、交流で何を得たのか、評価観がどのように更新されたのか、その経緯について示す。

| 日、場面、参加者 | 検討事項 | 検討結果 |
|---------------------------------|--|--|
| 4月5日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> 今年度研究のテーマと方向性 | <ul style="list-style-type: none"> 今年度は3年次研究である。2年次までの成果を踏まえ、本園の評価観（育ってほしいと考える姿に照らして、教師が行った環境構成や援助が幼児の育ちを支えるもの、またはそのための改善になっていたのか判断する考え方）の「確かめ」と「繰り返し」の3年目とする。 「評価観の更新」、「評価の仕組みの確かめ」、「成果の発信」により、2年次からのさらなる充実を図る。 成果をどのように発信していくかについて、今後検討が必要である。文科省委託研究と関連させ、動画での発信も視野に入れていく。 研究の表題はそのままとする。 |
| 4月6日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> 今年度研究の方向性についての検討 | <ul style="list-style-type: none"> 今年度の研究方法には、大きく分けて「評価」と「発信」の2つの視点がある。「評価」の具体は、4つの取組（保育記録・のびのび保育シート・カンファレンス・期の振り返り）、7つの評価観の更新である。「発信」の具体は、研究協力者の園との交流、作成動画の発信である。 研究として何を導き出すのか、その見通しをもっておくことが重要となる。他園との交流は、数年にわたり継続していくことで汎用性の高いものを目指していくことが必要である。 2年次までの研究を踏まえながら、附属園以外からの評価を通して、本園の評価のしつこさをさらに更新していく必要がある。ここで大切にしたいのは、他園とのコミュニケーションを通して、保育者が課題や葛藤をどう乗り越えたか、保育者の「観」がどうつくられていったか、そのプロセスである。 |
| 4月15日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> 観点⑤「幼児の姿を基にした援助のレパートリー」についての事例検討 | <ul style="list-style-type: none"> 「釣竿に釣り糸を結んでほしい」と幼児に頼まれた事例を基に、どのような援助のレパートリーがあるかを検討した。どのような幼児の育ちの姿を想定するかで援助の仕方が変わることを共有した。 |
| 4月19日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> カンファレンスとのびのび保育シートの価値についての共有 「発信」の一環としての動画作成の方向性 | <ul style="list-style-type: none"> 「のびのび保育シート」のように自由な形式で記録を取ることは、観点は定まりにくい可能性がある。しかし、カンファレンスを毎日行うことで、日々の保育が意味づけられ、結果として観点が定まることにつながる。大切にしたいのは、日々の葛藤を常に話題にし、それを共感し合うプロセスである。 動画での発信にかかわって、日々のデジタル記録をどの機材を使って、誰が、どういう視点で撮るかについて今後検討が必要である。 |

| | | |
|--|--|--|
| <p>4月28日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・観点③「幼児のしていることを肯定的に捉える」ことを核とした教師の声かけ援助について | <ul style="list-style-type: none"> ・命令、指示、否定の声かけをすることは、幼児の学びを妨げる危険性がある。幼児が何がしたかったのか、どうしてそのようなことをしたのかを聞きながら、幼児の思いを肯定的に受け入れることの重要性が再確認された。 |
| <p>5月6日 研修 各クラス担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・今後の研究の具体的な方向性 | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度も期ごとにエピソード事例を蓄積していくこととする。 ・5月の研究保育に向けて、日案の形式や構成の再確認を行った。 |
| <p>5月7日 研修 研究協力者、各クラス担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究推進の概要と、動画を活用した研修の在り方について | <ul style="list-style-type: none"> ・動画の発信によって、「4つの取組」のサイクルが初見の人にどう伝わるのかを考えた作成を行う。動画作成においては、作成の意図を明確にすることが大切である。 ・雨どい遊びの援助をしている動画は、附属園の援助の仕方が伝わるようにしたい。発達段階や動画の裏にある幼児のストーリーも伝わるように留意する。 ・研究方法（1）「4つの取組」では、保育記録やカンファレンスからエピソード事例を抽出し、納得版として蓄積することで、「形」として残していく。 ・研究方法（2）「7つの評価観による保育観の更新」では、昨年度意味づけられた文言を定期的に参照しながら思っていることを語り合う。その過程で言葉の価値づけに変容があることが想定される。その変容を捉えて、7つの評価観の「木」を充実させていく。ここで大切にしたいのは、完成した文言よりも常に語り合うプロセスである。そのプロセスの具体をイメージしておく必要がある。 ・研究方法（3）「評価の取組の発信と交流」について、「交流」とは何を指すのが、今後検討が必要である。他園の方と一緒に保育を語る、参観し合う、保育に参加する、のびのび保育シートの形式で保育記録を書くことを共有するなど、今年度交流をどこまで進めるのか、担任を交代して保育するなど、その具体を明確にする。他園に一方的にしてほしいことを任せるのではなく、一緒に参画していく姿勢を大切にす。 ・研究方法（4）「大学教員との連携」では、大学教員の立ち位置を明確にする。他園との交流のとき、一緒に園に行き専門的な視点からの見解を述べるなど、「架け橋」としての役割を担うようにする。 |
| <p>5月12日 水曜カンファレンス 各クラス担任・副担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・幼児理解について | <ul style="list-style-type: none"> ・具体的な保育の場面を挙げながらどのように幼児理解を進めているかを共有した。カンファレンスによって幼児の姿を共有し、適切な援助を模索していくことを日々繰り返すことの重要性が再確認された。 |

| | | |
|---|--|--|
| <p>5月14日 カンファレンス各 クラス担任・副担 任、養護教諭、他 園の幼稚園教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> 7つの保育観と、保育をする職員の環境改善について | <ul style="list-style-type: none"> 他園の教諭との交流から、他園の保育観についての違いについて話題となり、幼児のしていることを肯定的に捉えることの重要性が再認識された。 他園と附属園の保育の評価のシステムを比較し、そのよさや改善点について検討した。管理職や役所に提出するだけの記録ではなく、保育者、子ども、他の職員にとって有意義な記録になることが望ましいということが共有された。 |
| <p>5月17日 5月24日 研修 各クラス担任、養 護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> 研究保育プレゼンテーション資料の検討 研究協力者の園との交流の構想 | <ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーション資料は、これまでの研修の流れや今年度の研究方法が端的に伝わるよう、言葉の精選や画像の変更を行う。 他園との交流の具体について検討した。10分カンファレンスを体験してもらい、オンラインでの語り合い、訪問、参観、のびのび保育シートの形式での記録、動画を活用した研修、7つの評価観についての検討、定期的な文書のやりとりなどが考えられる。まずは、附属園職員がの交流する園を参観するところからはじめる。その後の交流は園との話し合いにより、できそうなことを決めていくという方針を共有した。 |
| <p>5月19日 水曜カンファレン ス 各クラス担任、副 担任、養護教諭、</p> | <ul style="list-style-type: none"> 言葉がけについて | <ul style="list-style-type: none"> 保育中によく使う言葉、使わない言葉を共有し、カテゴライズした。「どうしたかったの？」など、幼児のしていることを肯定的に捉える言葉をよく使っていることが自覚化された。また、「だめ」（禁止）や「○○しなさい」（命令）という表現では幼児の主体性を育てられないことを再認識した。 預かり保育においても、正規時間と同じ歩調で保育を進められるよう、まずは預かり保育の職員と保育の評価について交流する場の設定が必要である。 |
| <p>5月27日 研修 各クラス担任、養 護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> 他園との交流の見通し | <ul style="list-style-type: none"> まずは研究協力者の園に足を運び、どのような仕組みで保育の評価を行っているかについて実態を知ることが交流のスタート地点と位置付ける。留意するのは、互いの園に過度の負担がかからないようにすることである。「4つの取組」と「7つの評価観」を基に、一緒によりよい評価の仕組みやカリキュラムを考えていくというスタンスで交流を行う。 期の振り返りの時期である。評価観の変容をさらに自覚できるよう、のびのび保育シートをどのようにまとめているか、互いに共有し合う場があるとよい。 |
| <p>6月2日 水曜カンファレン ス 各クラス担任・副 担任、養護教諭、 預かり保育担当職</p> | <ul style="list-style-type: none"> 預かり保育職員との交流 | <ul style="list-style-type: none"> 5月19日の検討を受け、具体的な場面を捉えて、肯定的な言葉がけについて検討した。大切にしたいのは、預かり保育の時間も正規の時間も同じ歩調で保育をすることである。禁止や命令の言葉がけを控え、幼児の自主性を大切にしたい言葉がけに言い換えることを再度共有した。 |

| 員 | | |
|---------------------------------------|---|---|
| 6月8日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> 研究にかかわる広報について | <ul style="list-style-type: none"> 研究会の案内はがきの内容を検討した。作成した動画のQRコードを載せ、取り組みを発信することができる、本園の評価の取組に興味をもつきっかけになる。 |
| 6月23日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> 期の振り返りの共有 | <ul style="list-style-type: none"> 年少クラスは安心感をもつため、年中クラスは新しい環境になじむため、年長クラスは年下の園児に遊びの伝承をしながら遊びに没頭するための援助や環境構成について振り返った。発達段階よっての違いが明確になった。また、どのクラスも幼児理解することを核として援助を考えてきたことが共有された。 期の振り返りを通して、カンファレンスが次の保育に与える効果について共通認識を得た。 |
| 6月24日 交流 年中クラス担任、副担任、研究協力者 | <ul style="list-style-type: none"> 研究協力保育園職員との交流（於：附属幼稚園） | <ul style="list-style-type: none"> 年中クラスのおそびの時間についての協議を行った。遊びが継続するための声かけ援助についてアドバイスをいただき、共に援助のレパトリーを広げた。また、互いの年中クラスの幼児の姿を共有し、新たな援助の方向性について検討し、カンファレンスにより、幼児理解をすることの重要性を再確認した。 カンファレンスの時間の捻出が難しいという課題についても共有し、今後その解決策を交流の中で探っていくという方向性が決まった。 |
| 6月28日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者 | <ul style="list-style-type: none"> 6月までの2ヶ月間の研究の振り返りと、今後の見通し | <ul style="list-style-type: none"> 期の振り返りをするよさは、保育者が何を意識し、どこを焦点化して保育をしているかが自覚できる場所にある。大切にしたいのは、この振り返りをするのが本年度の研究にどう繋がるのかを意味づけていくことである。なお、形式はこれまでのものを踏襲していく。 これまでの研究ヒストリーを振り返ると、言葉がけについてよく検討がなされている。教師の援助としての言葉がけには、信頼関係、相手への理解が必要であることを再認識した。また、研究の軌跡として残していくためには、研究とのつながりを明確にすることが必要である。 附属園がどのようなスタンスで交流していくかを明確にすることが大切である。また、どのように交流のきっかけをつくるかを今後検討する必要がある。まずは、「園」との交流というよりは、「人」（園の中の一個人）とのつながりをつくることから始めるということを共有した。 どのような評価が附属園らしいのか、それが明らかになっていくような交流にするための枠組みを考えていくことが今後の検討事項である。 |
| 6月29日 交流 年少クラス担任 | <ul style="list-style-type: none"> 研究協力こども園との交流（於：研究協力こども園） | <ul style="list-style-type: none"> 研究協力こども園の保育参観後、附属園職員1名、こども園職員3名（園長・年少クラス担任2名）で顔合わせ会を行い、自己紹介や感想交流を行った。シフト等のため、ゆっくり職員間で相談したり製作等の準備をしたりする時間が |

| | | |
|---|---------------------------|---|
| | | とれない現状を共有した。顔合わせ後、子ども園園長と次回の交流について話し合った。年少クラス担任に限らず、次回は時間がとれる職員とカンファレンスの場を設けること、そこで附属幼稚園で行っている 10 分間の振り返りや保育記録のとり方について具体的に紹介することが決まった。 |
| 6月30日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、預かり保育担当 | ・保育中の「うーんポイント」の共有 | ・うがいの励行をする声かけ「ガラガラのいい音がする」が、うがいの本質ではないという外部からの声があったことを受け、この声かけについて話題になった。あくまで、この声かけによりうがいへの興味や意欲が高まるようにするだけで、この声かけだけで終わるわけではないことを共有した。「のどのばい菌を何匹やっつける？」などと声をかけると、うがいの本質を捉えた声かけになっていくかもしれないという意見も出た。言葉がけの工夫が幼児の自ら育とうとする力を支える一助になっていくことを再確認した。 |
| 7月7日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、預かり保育担当 | ・保育中の「うーんポイント」の共有 | ・「七夕発表会のピアノ演奏中、席を立って演奏者に近づき、空いている鍵盤を弾いていた子をどう援助するか」という話題になった。まずはピアノから離し、弾きたかった気持ちを認めながら一緒に歌を歌う、試しに少しだけ弾き、少し満足したら演奏が終わった後に一緒に思い切り弾く、保育者がピアノそばに寄り添いながらその子の気持ちを聞いていくなど、保育者によって異なる援助をすることが明らかになった。このようにカンファレンスが援助のレパトリーを増やすことに繋がっていることを参加者全員が改めて自覚した。 |
| 7月13日 交流 年長クラス担任 | ・研究協力幼稚園との交流（於：研究協力幼稚園） | 保育参観、4名でのカンファレンス |
| 7月14日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭、預かり保育担当 | ・保育中の「うーんポイント」の共有 | ・保育中の「うーんポイント」について、各々が話をした。その中で話題の中心になったのが、「2名の幼児が遊んでいるところに、仲間に入った1名の幼児がイメージを共有できず、遊びが途切れてしまった」という場面の援助についてである。会話の中で、それぞれの幼児の思いをよく読み取り、どう折り合いをつけるか考えることが大切である、今後その幼児の遊びをしっかり捉え、援助していくこと大切であるということと共有した。 |
| 7月27日 交流 年少クラス担任、副担任、年中クラス担任、年長クラス副担任、研究協 | ・研究協力こども園との交流（於：研究協力こども園） | ・研究協力こども園の保育参観後、附属園職員2名、研究協力者1名、こども園職員8名でカンファレンスを行った。現在書き溜めている記録が、保育者や子どもにとって有意味なものであるかについて検討がなされた。附属園の取り組みとこども園の記録を比較検討する中で、「大 |

| | | |
|----------------------------------|-------------------------------|--|
| 力者 | | きな紙に子どもの名前を事前を書いておき、担任と副担任で気づいた姿を書き足していく形式」が新しく提案された。よつば園では、補助簿をなくし新たな形式を取り入れることで、負担感を減らし、保育者や子どもにとって有意義なものにしていきたいという方向性を聞くことができた。 |
| 8月3日 交流 年長クラス担任 | ・研究協力幼稚園との交流（於：研究協力幼稚園） | 担任、副担任、教頭を含めた14名での研修に参加 |
| 8月3日 研修 | ・今後の交流のもち方について ・評価観の更新について | <ul style="list-style-type: none"> ・交流の目的や意義について再確認する中で、本園の評価の取組を実際に見てもらい、率直な意見をいただく機会があるとよいということを共有した。そこで、9月1日、8日の2日間、保育と水曜カンファレンスを公開することになった。 ・1学期の保育を通して、評価観がどのように更新されたのかを職員全員で見出していくこと、保育で大切にしていることについて再考することなど、今後の研究の方向性について協議した。 |
| 8月5日 交流 各担任、年少クラス副担任、研究協力者 | ・研究協力保育園との交流（於：研究協力保育園） | 附属幼稚園職員4名・研究協力者参加 保育参観後、担任2名とのカンファレンス |
| 8月19日 研修 各クラス担任、副担任、養護教諭 | ・公開保育の研究発表について | ・今年度の研究発表は、「4つの取り組み」「7つの評価観の更新」「エピソード事例」「他園との交流」「今年度赴任職員の評価観の更新事例」で構成することを確認した。 |
| 8月24日 研修 各クラス担任、養護教諭 | ・今後の研究の方向性について | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果を見出していくにあたり、「『評価』とは何か」について再考する必要がある。職員間での意識の統一、評価観を共通理解していくプロセスを強調していく方向性にしていくことを共有した。 ・データでは語りにくい保育をどう言語化していくのかをさらに考えること、評価観がなぜ変わってきたのかを文章化し、多くの方の共感を得られるようにすることを今後の検討事項とする。 ・交流については、単発になりやすいため、継続して行っていくことを確認した。附属園のやり方を押しつけるのではなく共に考えていくというスタンスが大切である。附属幼稚園がセンター的な役割を果たしていくことが理想である。 |
| 8月31日 研修 各クラス担任、養護教諭 | ・ミニ研究保育の水曜カンファレンスについて | ・他園の先生方との保育協議では、カンファレンスでの心もちや時間の捻出の仕方、保育記録の取り方について協議し、本園の取組と比較してどう考えたか、実現は可能なのかを、率直に意 |

| | | |
|--|-------------------------------|--|
| | | 見交流するという方向性を確認した。 |
| 9月1日 交流 各クラス担任、副園長、研究協力園職員 | ・ミニ公開保育（研究協力保育園、研究協力幼稚園の職員参加） | ・4つの取組について共感が得られた。特にカンファレンスについて、毎日の振り返りを10分という限られた時間の中で焦点を絞って話をすることの大切さについて共有した。また、振り返りは自由な記述スタイルが書きやすいことが協議された。他園では、これらの取組を参考に、園のスタイルに合うようにアレンジして保育記録の形式を検討しているという話があった。水曜カンファレンスに参加した他園の職員の感想として、全職員で集まることで心もちが揃ってくるのではないかと、全職員というところに価値があるのではないかと感想を聞いた。 |
| 9月8日 水曜カンファレンス 交流 各クラス担任、副担任、養護教諭 | ・ミニ公開保育（研究協力幼稚園職員参加） | ・水曜カンファレンスでは、「保育をするときに大切にしていることは何か」について、全職員で協議した。その過程で、保育での迷いをカンファレンスを通して考え続けること、そのカンファレンスが無理なくできるような位置づけであることが大切であると共有された。現段階では、園全体としては、『考え続けるプロセスが持続可能である』ことであると意味付けられた。これが8つめの評価観として、更新された。 ・他園職員との保育協議では、若手の職員の迷いをどう軽減していくかが話題の中心になった。日々の振り返りの積み重ね、カンファレンスの雰囲気などの大切さが共有された。また、記録は、月暦への書き込みをそのまま引き継いでいくことで、細かな打ち合わせ事項も伝達できると他園職員からの考えを聞いた。 |
| 9月10日 研修 各クラス担任、養護教諭 研究協力者 | ・研究発表について | ・ミニ研究保育では、評価観の交流など附属園での双方向的な共有が他園にも影響しているのではないかと共有された。 ・カンファレンスや交流は、他者を経由することで言語化されて自分に返ってくるといえるのではないかと。 ・8つめの評価観において、なぜプロセスが大切といえるのか、プロセスという言葉が指す意味は何か、8つめの評価観ができるまでにどのような過程があったかについて説明ができるように言語化することが今後の課題である。 |
| 9月22日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭 | ・遊びの材と場について | ・熱中症対策として、園庭に設置されたテントについて話題になり、そこに集まる幼児の楽しみを話し合った。ビールケースの置き場をテントの近くにすることで、幼児の遊びが広がるのではないかと考えが共有され、明日からの環境構成に生かされた。 |
| 10月26日～ 11月1日 | ・年齢別研修会への参加 | ・年齢別検討会では、本園で作成した動画を活用して、教師の言葉かけについて研修を行うこと |

| | | |
|--|---|---|
| 交流 各クラス担任、副担任 | 10/26 A保育園 10/27 B保育園 10/28 C保育園 A保育園 11/1 D保育園 | となった。参会者からは、雨どい遊びの事例から肯定的な言葉がけについて学びが深まった、今後も、動画を活用した研修を実施してほしいという意見が挙がった。 |
| 12月1日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭 | ・ Eこども園、F附属幼稚園、G附属幼稚園の共有 | <ul style="list-style-type: none"> ・ F附属幼稚園、E子ども園で交流した職員が、室内遊びの環境構成について話題にした。遊びを発展させるための場や道具の工夫について本園と比較し、保育の捉え直しを行った。 ・ G附属幼稚園での外遊びについて話題になった。安全管理と主体性を天秤にかけながら、本園ではどのように外遊びでの環境をつくっていくべきかを話し合った。 |
| 12月15日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭 | ・ H附属幼稚園・I子ども園の共有 | <ul style="list-style-type: none"> ・ H附属幼稚園と交流した職員が、保育室のロッカーの位置などを工夫することで遊びの場をつくること、幼児の知識の範囲を考えながら遊びの中にスキルを取り入れることなどを話題にした。 ・ I子ども園での交流では、年少クラスの職員とままごと遊びをどう発展させるかについて、一つのクラスの実態を基に協議した。道具を出す数についての考え方、異年齢での遊びの大切さなどが話し合う過程で話題になった。これらのことを水曜カンファレンスで話題にしたことで、本園で大切にしている保育への考え方がさらに明確になった。 ・ 共有されたことを基に3学期から保育室の環境構成を変える、道具の置き場所や活動の在り方を見直すなど、本園の保育について捉え直した。 |
| 12月16日 交流 年長クラス担任 | ・ 研究協力幼稚園での振り返り | ・ 附属幼稚園職員1名参加 |
| 1月11日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者 | ・ 今年度の研究のまとめ方について | <ul style="list-style-type: none"> ・ データに基づいた研究となるため、研究のまとめの冊子に載せ切れないデータについてはWEB版に示していく。 ・ 研究のまとめの冊子の冒頭に、この冊子は誰にどのような活用をしてほしいのか、附属園のセンター的な役割が果たせるような冊子として仕上げていく必要がある。 ・ 交流の成果として、他園の職員が何に気付いたのかを事実ベースでまとめていくためには、その対話を文章化し、記録として整理していくことが必要となる。 |
| 1月21日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究のまとめ方について ・ 来年度の研究について | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度の研究のまとめにあたり、保育の評価に携わった全職員の思いや迷い、今後の展望についてを協議する場が必要であることが共有された。 ・ 振り返る観点として、「4つの取組」「評価観」「交流」の観点がよいのか、「自分の保育の評 |

| | | |
|--|---|---|
| | | <p>価」「園全体での保育の評価」「外部からの保育の評価」の観点がいかに検討した。後者の3つの観点で振り返ることに決定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究の構想を広げるため、幼児教育の今日的な課題やこれまでの保育の研究について情報収集し、それらを共有した。今年度の評価の研究を踏襲するならば、交流を通して幼保小をつなぐシステムづくりをしていくことが考えられる。 |
| <p>1月26日 水曜カンファレンス 各クラス担任、副担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・研究の成果と課題について | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の保育の評価について「自分」「園全体」「外部」の3つの観点で振り返った。各々が付箋紙に自分の成果や課題を書き、それをKJ法的に整理して今年度の研究の成果と課題を見出す一助とした。 ・「自分」の観点では、「同じことをしたから保育の質が高まる」というわけではなく、迷いをカンファレンスで共有し、援助について考えていくプロセスが大切であったのではないかと成果を見出した。また、そこには4つの取組による評価の仕組みが機能していることが再確認された。 ・「園全体」という観点では、雰囲気よさがクラスを超えたかかわりをつくり、心もちを共有していくことにつながっているのではないかと話し合った。 ・「外部」については、交流をすることで新たな知識やアイデアを得たり、保育を捉え直すことにつながったりしたのではないかと成果が見出された。その一方で、交流の意義や目的、交流の仕方を再度見直していくことの必要性が課題として挙げられた。 |
| <p>1月26日 研修 各クラス担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・研究の成果と課題のまとめ | <ul style="list-style-type: none"> ・水曜カンファレンスで見出された成果や課題から、今年度の研究が「布」「銀河系」などに例えられた。職員一人一人が織りなす布は、そこに少しのほころびができて、すぐに修復していくことが可能であり、「みんな」で園の保育の質を高めているイメージである。また、1日、一週間、期などの周期的なサイクル、一人一人がつくる独自のサイクルが園全体として有効にまわっていることから、自転、公転する惑星に例えた銀河系をイメージした。「みんなで」取り組んだことが有効であったことがどちらのイメージにも共通している。 ・本園の保育の評価の取組や交流は、継続していくことが不可欠である。 |
| <p>2月4日 研修 各クラス担任、養護教諭</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究について | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果や課題を踏まえて、来年度の研究の方向性を話し合った。これまでにしてきた評価の取組や交流は今後も継続していく。それらが生かされるような研究テーマにしていくことを共通理解した。 |

| | | |
|---------------------------------|--|--|
| | | <ul style="list-style-type: none"> ・「かけはしプログラム」について話題にしていく中で、本園の大きな特徴の一つである「異年齢でのかかわり」「遊びの伝承」に着目した。異年齢でのかかわりについて研究していくことが、ひいては幼小接続にもつながるのではないかという仮説が立てられた。 ・交流を軸として、附属園のセンター的役割をさらに高めていく方向性についても話し合われた。年間指導計画の再構築やカリキュラム・マネジメントの視点での研究も、本園の教育や今後の幼児教育に寄与するのではないかと共有した。 ・今後のさらなる検討において、テーマを決定していく。 |
| 2月8日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究テーマについて | <ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究では、今年度の評価の取組を生かせるテーマが設定されるとよいことが共有された。全職員で保育をつくっていく（チームでの保育）在り方について研究していく一案が新たに出された。 ・研究テーマを話し合う過程で、今後の幼児教育の方向性を協議したり、附属園で大切にしていることや心もちを言語化していくことなどの今後の展望についても共有した。 |
| 2月9日 研修 各クラス担任、養護教諭、研究協力者 | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度の研究の成果と来年度への展望 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究冊子について、エピソード事例と納得版、評価観がどうつながるかをさらに明確にしておく必要がある。 ・来年度からの交流の位置づけについて、検討が必要である。交流で何を得たいのか、どのような内容を交流したいのかについてよく検討し、交流のパイプを太くしていく必要がある。 |
| 3月8日 研修 各クラス担任、養護教諭 | <ul style="list-style-type: none"> ・来年度の研究テーマについて | <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの評価のしくみに基づいて、4年次研究を行うこととなった。3年次までの研究の成果や課題を改めて振り返り、チームでつくっていく保育、異年齢での遊び、これまで園で大切にされてきたことなど、具体的なテーマについて検討した。 |